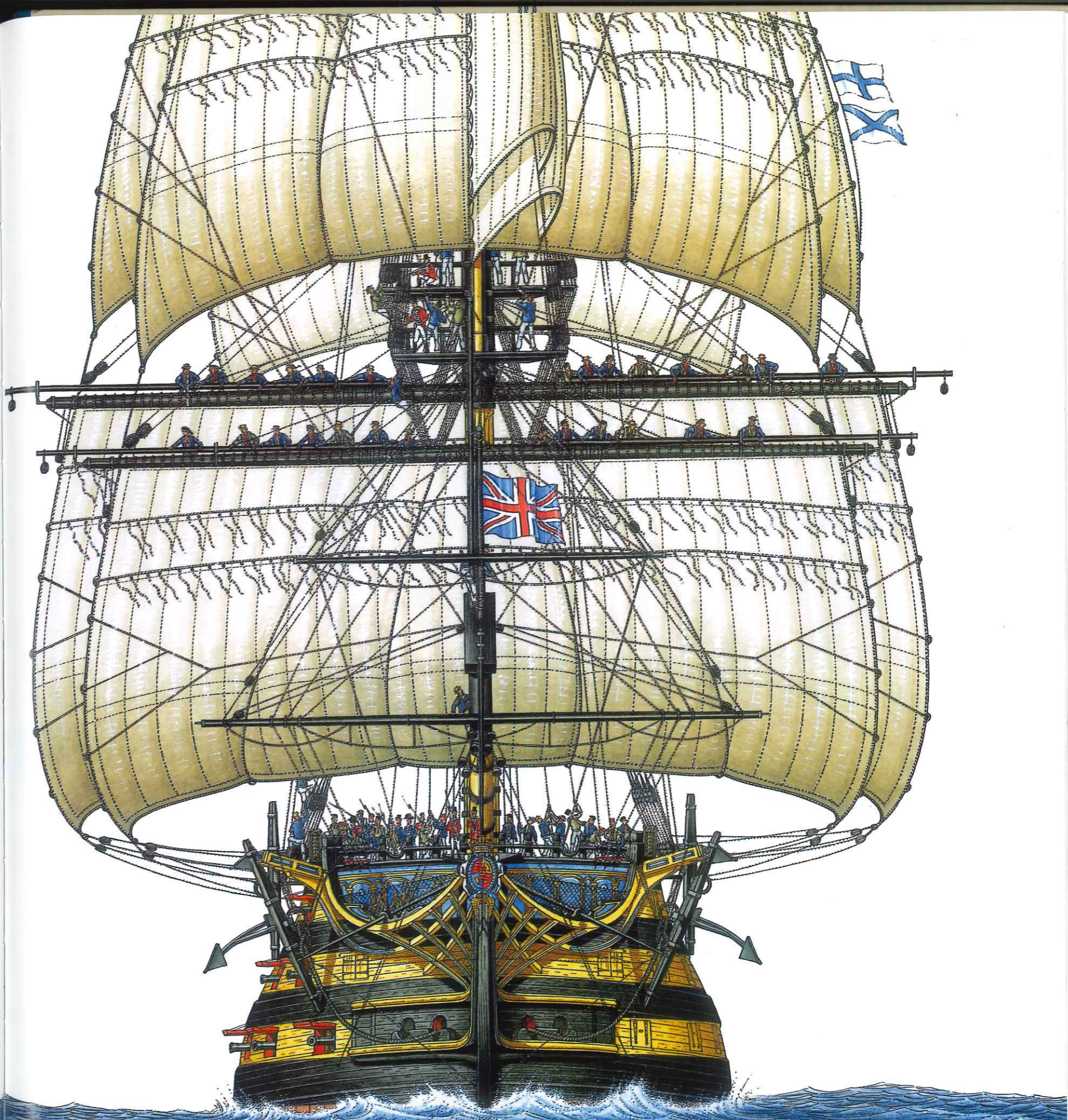
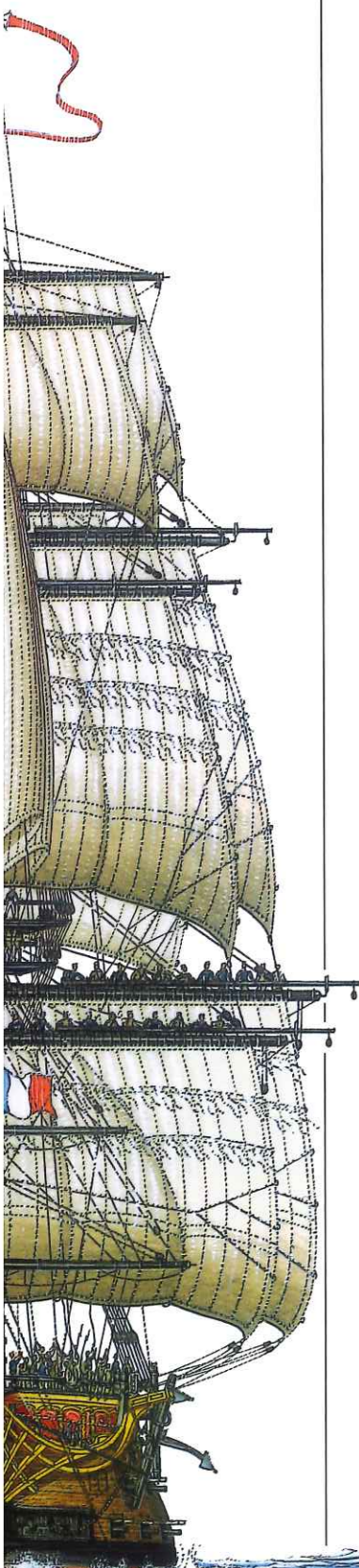


もくじ

「帆をはれ!」	8
航海中の健康	10
料理と食事	12
きゆうか ほきゆう 休暇と補給	14
航海中の仕事	16
せんとう 戦闘	18
すいみん 睡眠	20
こうかいじゆつ きりつ 航海術と規律	22
しかん 士官	24
ていとく 提督	26



帆をはれ！」



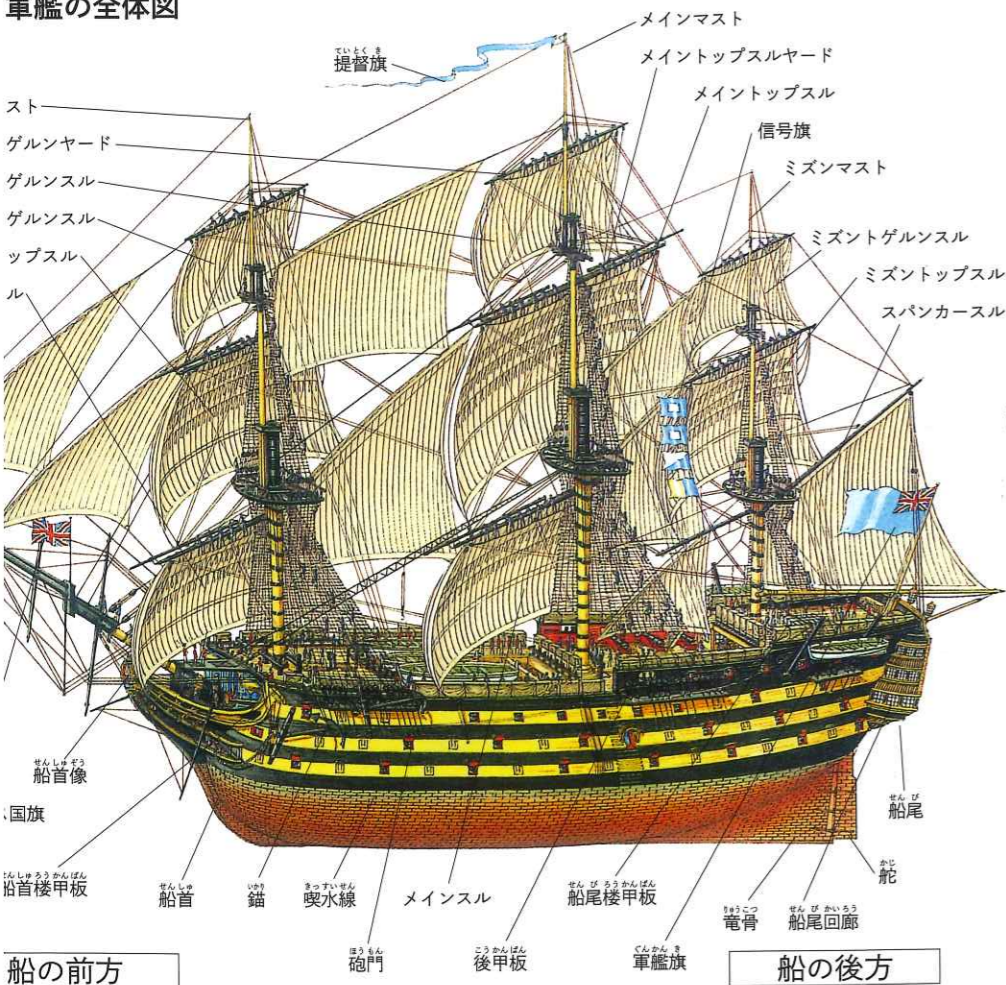
この絵の白い部分は、各見開きページで船のどこを見ているかを表す。

艦長がこの命令をくだすと、たちまち何百人もの水兵が木造の帆船軍艦の高いマストをのぼり、大きな帆を広げて、風で船が進めるようにした。船には約800人の乗組員に必要なものがなんでも積んであった。乗組員たちは世界を半周し、命がけで戦った。勝てば海を支配することができたか

海は主な貿易ルートだったため、最強の海軍を持つ国が世界を制した。での水兵のくらしはきびしかった。戦死や、事故、病気が多い上に、部じめじめして、暗く、こみあっていた。

の本では、1800年ごろのイギリス海軍の帆船軍艦をくわしく見ていく。

軍艦の全体図



船の前方

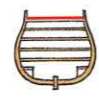
船の後方

3本の木造軍艦は上の絵のような構造だった。そびえたな3本のマスト（フォア、メイン、ミズン）が、帆を大きな水平のヤードを支えた。ロープは何百本もあをあやつつたりマストを支えたりしながら、複雑なを持つ船を走らせた。

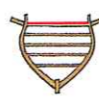
単位について
イギリス海軍では、「32ポンド砲」「ロープ1ヤード」というように、重さはポンド、長さはヤードで表した。この本では、キログラム (kg) とメートル (m) も記す。



船尾接甲板
船の最上部の甲板。船尾にあり、大砲は置かず、主に士官が使った。ここから近くの船に旗で信号を送った。



後甲板
メインマストの後ろにある甲板で、ここも主に士官が使った。艦長室の前にあつたため、艦長がすぐに出ていきやすかつた。オレンジ大の砲弾を使う12ポンド (5.5kg) 砲が12門置かれた。



船首接甲板
船首にある甲板で、主甲板より一段高い。道板で後甲板とつながっており、ここから帆の多くをあやつつた。大砲は4門のうちの2門が巨大な68ポンド (31kg) カロネード砲。これは近距離の攻撃が得意な「こらし屋」だった。



上砲列甲板
大砲がならぶ砲列甲板の最上層。上甲板でもあるため、真ん中は雨ざらしだった。ここにわたされた梁にポートが3そう置かれた。両側には24ポンド砲が15門ずつ、船尾側には提督室があつた。

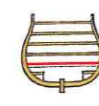
ごみ
ごみの多くはそのまま海にすてた。



中甲板
中間層の甲板で、両側には24ポンド砲が14門ずつ置かれた。ギャレー (調理場) もあり、乗組員の多くはここで寝たり食ったりした。船尾側には士官たちの部屋やラウンジ (食事室兼居間) もあつた。



下甲板
最下層の砲列甲板で、ココナツ大の砲弾を使う32ポンド砲が両側に15門ずつあつた。戦いのとき以外は、多くの水兵がここにハンモックをつつした。



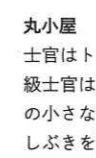
最下甲板
船倉をおおう甲板。物置にしたり、船倉に行くこと多い主計長や船大工が仕事場として使つたりした。



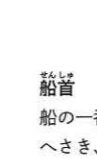
船倉
船の一番下にある巨大な倉庫。食料、飲料、砲弾、予備のロープや帆、修理用の木材など、航海に必要なものを保管した。



トイレ
船首のトイレは「ヘッド」や「くつろぎのいす」とよばれた。単なる穴のあいだですて、まわりから丸見えだった。乗組員800人に対して6つしかなかった。



丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



船首
船の一番前。へさき、ヘッドともよばれた。



バックラー
船体の穴に海水が入らないようにするための一種の栓。



丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



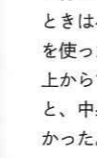
丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



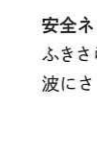
丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



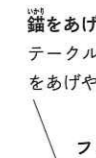
丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



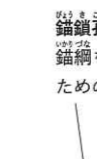
丸小屋
士官はトイレも特別だった。下級士官は丸小屋とよばれる円形の小さな個室に入り、雨風や波しぶきを防いで用を足した。上級士官は船尾の便利な場所にある自分専用のトイレを使った。



安全ネット
ふきさらしのトイレを使用中大波にさらされるおそれもあった。



釣架
船体からつきでた太い横木。この中に滑車が入っていた。



フィッシュテークル
釣架の上部を吊架架に固定してから、フィッシュテークルという滑車装置で下部をひきあげた。



釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



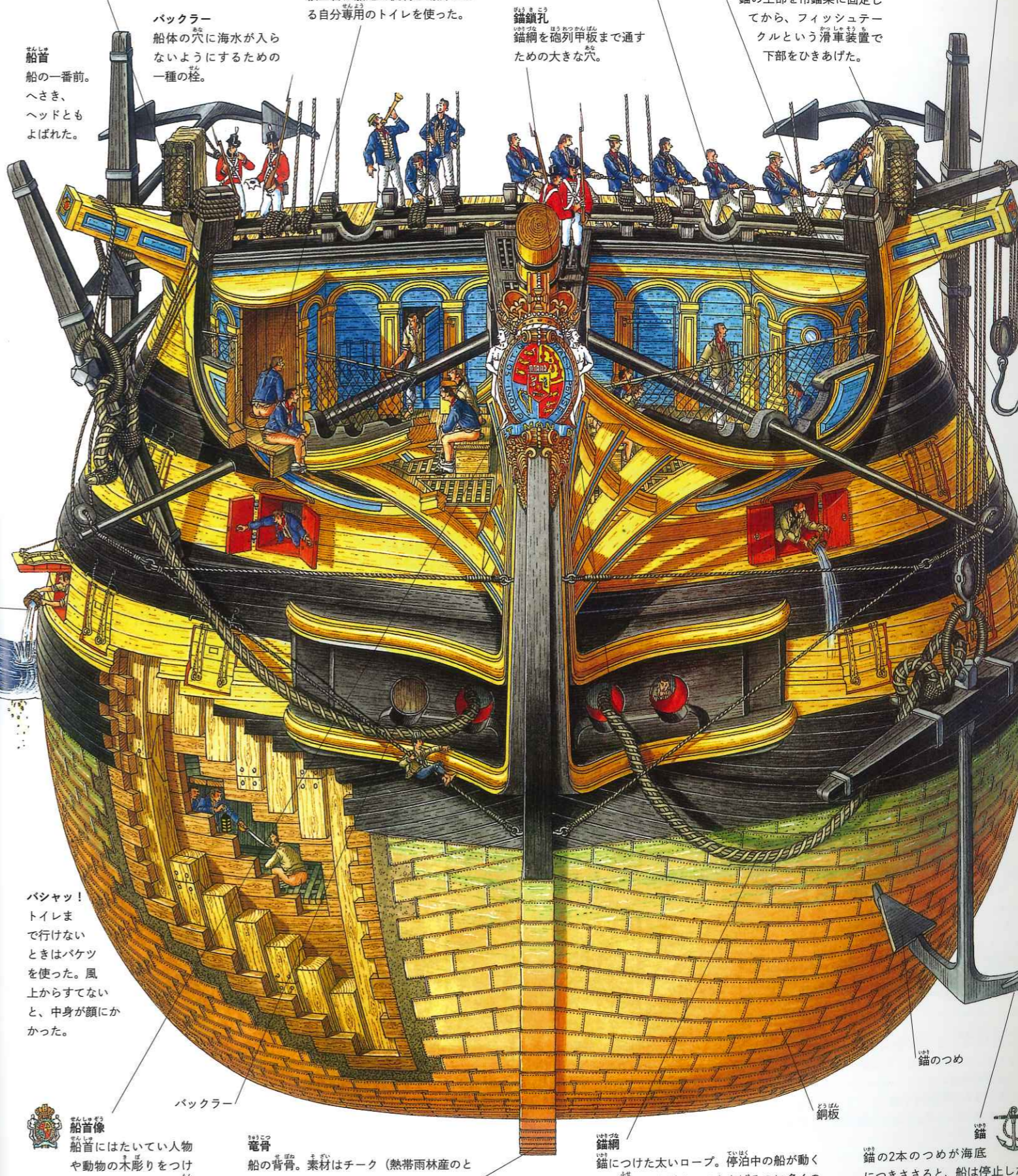
釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



釣架孔
釣架を砲列甲板まで通すための大きな穴。



船首にはたいてい人物や動物の木彫りをつけた。この船には、イギリスの紋章が入った盾がついていた。

船の背骨。素材はチーク (熱帯雨林産のとても固い木) で、長さ46m、太さ50cm角だった。

釣架につけた太いロープ。停泊中の船が動くのを防ぐほど重く、ひきあげるのに多くの力が必要だった。

船の2本のつめが海底につきささると、船は停止した。

航海中の仕事



航海中は気をぬくひまがなかった。船が正しい針路をとっているかをつねに確認するのはもちろん、帆を適切にはりつづける必要もあった。風を受ける帆が少なすぎると船の速度が落ちるし、多すぎると強風でマストが折れてしまう。ちょうどいい状態にするため、乗組員たちはヤード（帆をつるす水平の棒）にのぼり、帆を広げたりたたんだりした。たった6分で帆を全開にできる者もいた。そうじや船の手入れ、戦闘の準備といった毎日の仕事もあった。

縫い子
服をつくろったり縫ったりするのは、土曜の日課だった。裁縫のとくいな乗組員は「縫い子」とよばれ、士官の服をつくろう仕事をした。

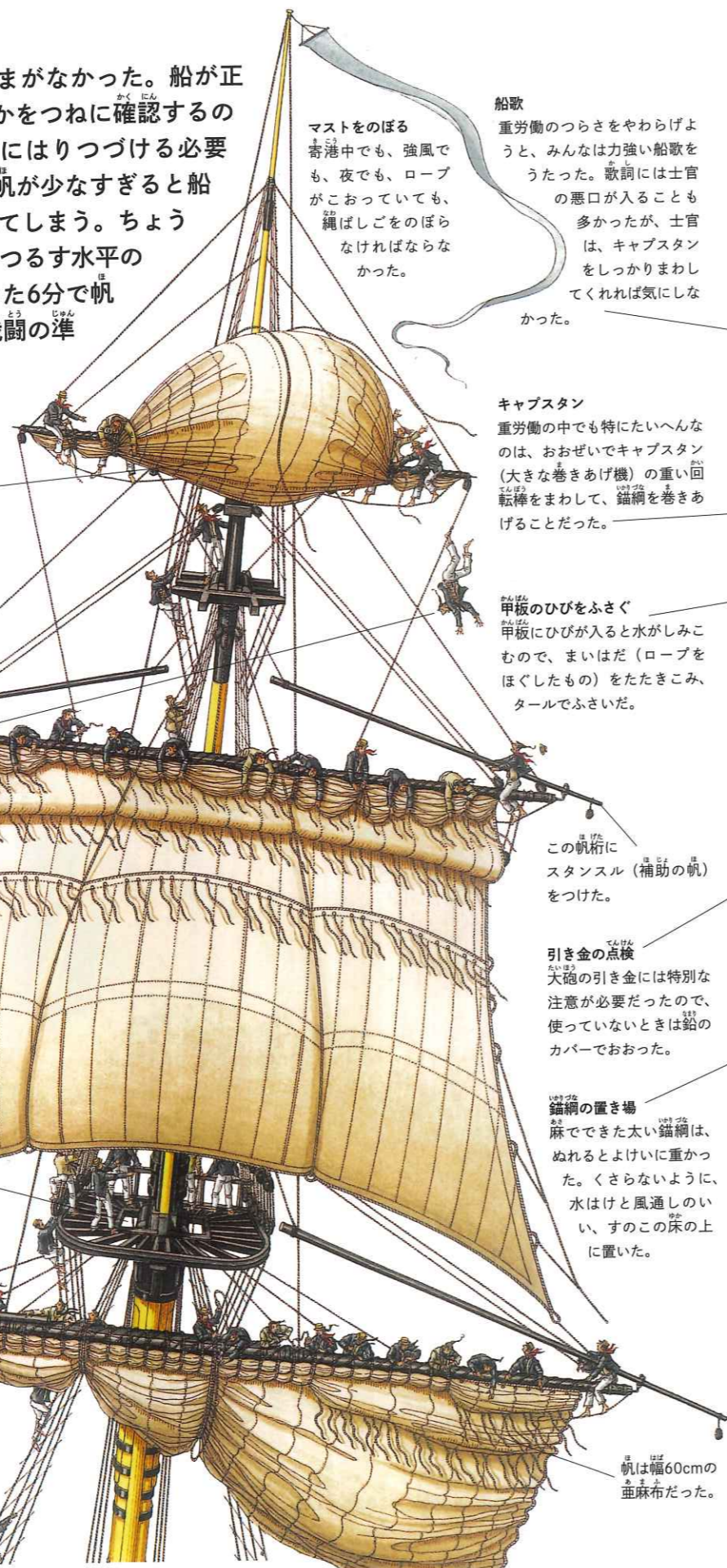
ヤードからの落下
安全ネットなどはなかったので、いそぐあまり足をすべらせると、冷たい海にとびこむか、甲板で骨を折ることになった。それでもベテランの多くはヤードの上を走ったり、足場綱にとびうったりした！

ラバースホール
水兵の多くはマストのどちゆうにある戦闘機を外側からのぼったが、自信のない者はラバースホール（新米の穴）とよばれる内側の昇降口を使った。

帆をたたむ
使わない帆はヤードの下にたたんだ。高いところであって目立つので、なるべくきれいにしようとしたが、風にはためくぬれた帆をきっちりたたむのはたいへんだった。

「のぼれ」
この命令がくだると、みんなはシュラウド（マストを支えるロープ）につけた縄ばしごをかけたぼった。持ち場につくのが一番おそかった者は、しばしばむちで打たれた。

帆を広げる
船の速度をあげるときは、櫓楼員（マストの上で作業をする水兵）たちが、まずはヤードアーム（ヤードの端）、つぎにパント（ヤードの中央）から帆を広げた。順番をまちがえると帆が一気に広がり、ヤードの上にまでふくらんで、ヤードアームにいる水兵をたたきおとすことがあった。



マストをのぼる
寄港中でも、強風でも、夜でも、ロープがこおっていても、縄ばしごをのぼらなければならなかった。

船歌
重労働のつらさをやわらげようと、みんなは力強い船歌をうたった。歌詞には士官の悪口が入ることも多かったが、士官は、キャプスタンをしっかりまわしてくれれば気にしなかった。

キャプスタン
重労働の中でも特にたいへんなのは、おおぜいでキャプスタン（大きな巻きあげ機）の重い回転棒をまわして、錨綱を巻きあげることだった。

甲板のひびをふさぐ
甲板にひびが入ると水がしみこむので、まひはだ（ロープをほぐしたものを）をたたきこみ、タールでふさいだ。

この帆桁にスタンズル（補助の帆）をつけた。

引き金の点検
大砲の引き金には特別な注意が必要だったので、使っていないときは鉛のカバーでおおった。

錨綱の置き場
麻でできた太い錨綱は、ぬれるとよけいに重かった。くさらないように、水はけと風通しのいい、すのこの床の上に置いた。

帆は幅60cmの亜麻布だった。

帆をあやつる
帆をあやつるのによく使うロープは、ビレーピンという棒に巻いてあった。このピンは、メインマストの後ろにある横木の穴にさしこまれていた。ピンを穴からぬくと、たちまちロープがほどけた。



帆の手入れ
帆はロープやヤードにこすれるので、縫帆手たちがいつも補修していた。

動く大砲
船がゆれると大砲も動き、物や乗組員をおしつぶすことがあった。

鳥とポート
帆布のカバーは、ポートと、その中で飼われている食用の鳥を雨から守った。

帆の虫干し

虫干し
準備の帆やロープは、天気の良い日に外に出して虫干した。

ロープをつなぐ
新米の水兵は、切れたロープのつなぎかたを学んだ。

メッセンジャーケーブル
錨綱はとても太く、キャプスタンに直接巻きつけられなかったので、錨綱につないだメッセンジャーケーブル（細めの長いロープ）をかわりに巻きつけた。

帆の確認
帆には木の札を縫いつけ、どのヤード用かわかるようにした。帆を広げてさがさなくてもいいように、札がすべて見える状態で保管した。

新米の水兵
水兵たちはいつも風上から縄ばしごをのぼり、風がふいても内側にたおれるようにした。それでも新米には命の危険があった。

海にほう死者は海にむった。縫帆いやいや死体るんだ帆布をせ、海中にしに頭と足の位を入れた。

が、木もどこかしたので、船なることは

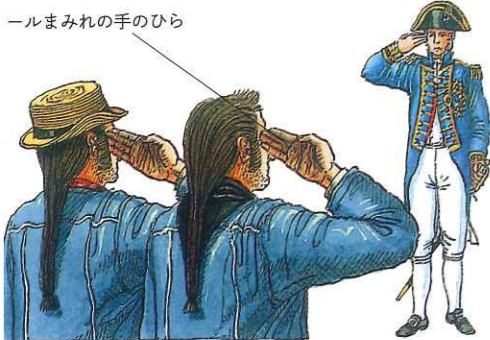
ネズミは糞を食べて、つに退治する必要があ

提督



帆船軍艦は通常、同じような軍艦やもっと小さな船と艦隊を組んで航海した。全体を指揮する提督は、すぐれた艦長の中から選ばれた。海軍の中でもっとも地位が高く、全責任を負ったため、戦いに勝てば称賛的に、負ければ非難的になった。もし決断をあやまれば、時にもどったときに苦しい立場になったが、海上から海軍本部にすぐに報告する手立てはなかった。こういった重責の見返りに多大な報酬を得ていたのも、専属のコックと20人の召使いを使えるほど、船では優雅にいらした。敵船をつかまえると、賞金の8分の1が提督のものになった。

海軍の敬礼



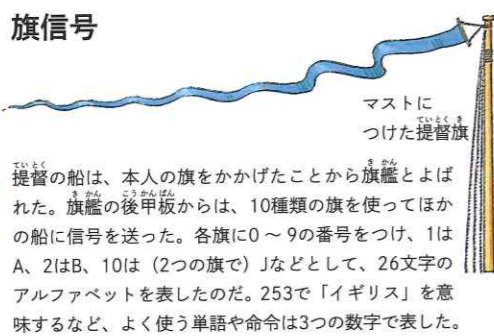
提督は、ロープのタールで黒くよごれた手のひらを自分にむき、上官、特に提督に力をこめて敬礼した。

賞金



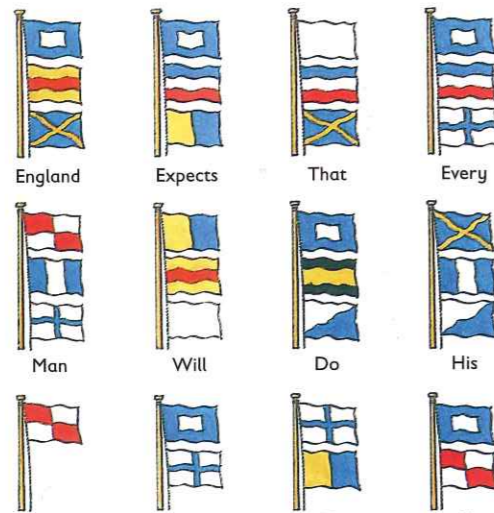
戦いに勝つと、政府が敵船の価値に見合う賞金を出した。その4分の1は、敵船をつかまえた船の全水兵で分けたため、00門艦ではひとりあたり2000分の1以下になった。艦長は3分の船がつかまえた敵船の賞金の4分の1をもらった。提督は艦隊の全賞金の8分の1をもらって大金持ちになった。

旗信号



提督の船は、本人の旗をかかげたことから旗艦とよばれた。旗艦の後甲板からは、10種類の旗を使ってほかの船に信号を送った。各旗に0~9の番号をつけ、1はA、2はB、10は(2つの旗で)Jなどとして、26文字のアルファベットを表したのだ。253で「イギリス」を意味するなど、よく使う単語や命令は3つの数字で表した。

ネルソンの信号



1805年のトラファルガーの海戦直前、ネルソン提督は「イギリスは各人が職責を果たすことを信ずる」という旗信号を送ろうとした。しかし信号士官のバスコーから、1字ずつ表す「信ずる (confides)」ではなく269で表せる「期待する (expects)」をすすめられ、けっきょく上の上になった。

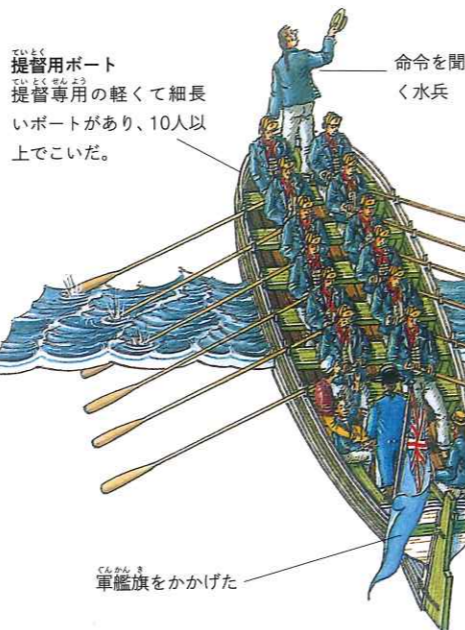
信号旗の整理棚
信号旗は、まちがえずにすぐとりだせるよう、しっかり巻いて整理棚に分類した。

トイレそうじ
水洗ではない士官のトイレのそうじは、召使いにとっていやな仕事だった。

艦長の執務室
艦長の執務室も、寝室と同じく船尾にあった。操舵室に近いので、緊急時もすぐ指揮をとることができた。

オウムのおしゃべり
長い航海のおみやげにオウムを飼う提督もいた。若い士官候補生は、提督の悪口やのしり言葉をオウムに教えた。

提督用ポート
提督専用の軽くて細長いポートがあり、10人以上でこいだ。



船尾回廊
上の船尾回廊には艦長のトイレ、下の船尾回廊にはほかの士官のトイレがあった。船尾回廊はカラフルなペンキや彫刻でかざられた。

提督の執務室
提督には艦長より広い執務室があった。床はタイル張りに見えるよう、四角をえがいた帆布を敷いていた。

家具類
艦長は自分の部屋を好きなようにできた。中には陸の家のごうかにする者もいた。ある艦長は部屋を図書室にしたので、「軍艦の艦長室じゃなくて本屋さんみたいに見えた」。

ランタン
夜に船同士がぶつからないよう、船尾後甲板に鯨油のランタンをともした。

信号旗をとりだす
下級士官か水兵が、必要な信号旗をとりだした。

艦長の執務室

トイレをそうじする召使い

船尾の窓
船尾は砲撃される心配がほぼないため、艦長の執務室にはながめや日当たりのいい窓がついていた。

ベンチ
窓ぎわにならんだクッション付きのベンチは、中が物入れになっていた。

一等海射の部屋
艦長のつぎに位が高い一等海射は、机とつりさげベッドのついた自分の部屋を持っていた。その船尾回廊には専用トイレもあった。

ランジの船尾回廊
ランジの船尾回廊の使用は「紳士」に限られていた。下級士官の多くは紳士と見なされず、ふきさらしのトイレを水兵と共用した。

小型武器の手入れ
マスケット銃、ピストル、剣などの小型武器は潮風ですぐさびるので、つねにそうじやさびとりが必要だった。

掌砲長の寝床
帆布の間仕切りは、夜に多少のプライバシーをあたえた。日中はとりはらわれた。

舵頭材かくし
士官のランジにある大きなテーブルは、床の穴からつきだした舵の軸の頭をかくした。

舵柄
舵柄は長い木の棒で、これを動かすと舵がまわり、船の向きが変わった。

航海長の部屋
位がさがるほど部屋もそまつになった。航海長は操舵室の近くにいる必要があるため、後甲板に部屋を持っていたが、専用のトイレはなかった。

バイオリンを楽しむ
士官の中には、空き時間に楽器演奏や剣の練習をする者もいた。

戦略を立てる
ほとんどの命令は提督が出したが、艦長と上級士官が重要な決定の手助けをした。

婦人のかくれ穴
船倉の船尾側はもっとも安全で、女性や子どももかくせたので、「婦人のかくれ穴」とよばれた。

信号士官
信号はすべて信号書にのっていたが、よく使うものは短く、覚えやすかった。ネルソンのお気に入りの「接近戦をなえ」は1と6の旗だけで表した。

艦長の船尾
艦長の机
ここで手紙や航海誌を書いた。

風を読む
船尾回廊の窓は、風を読むのに使った。

航海長の部屋

試験勉強
12ポンド砲
ほかの士官の部屋と同様、艦長の執務室にも12ポンド砲があった。

艦尾砲
大砲は基本的に横向きだったが、2門の艦尾砲だけは、追ってくる敵船を船尾の銃器室から砲撃した。

いすをなげろ!
戦闘準備命令が出るたびに提督の家具は船倉にしまうか、緊急時にいすをなげろ!

試験勉強
士官は、上の位にあがるための試験を受けた。多くは実地で学べたが、掌砲長にあがるだけでも、あいど本での勉強が必要だった。

